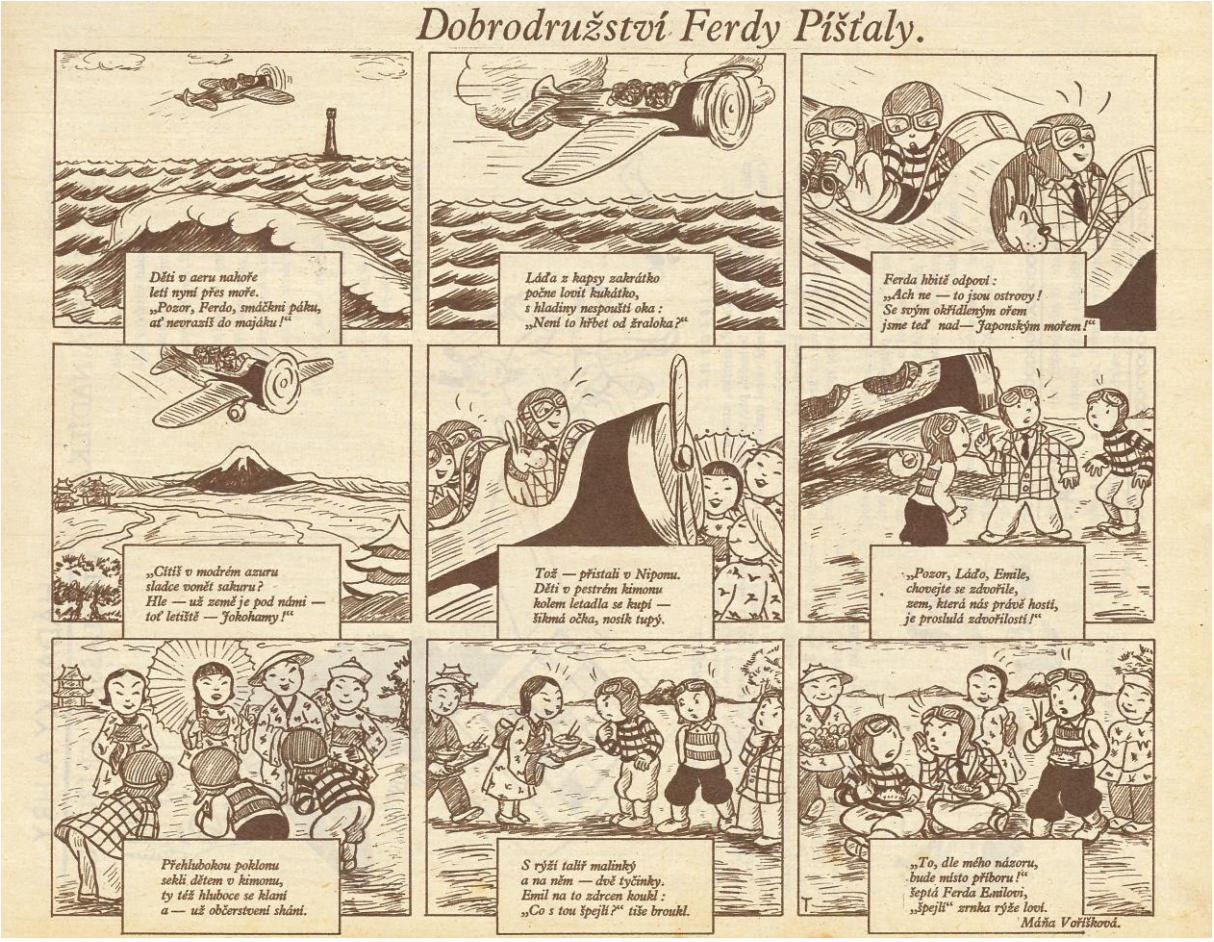

杉並の十一夢

《あの碧い水平線から
桜の柔らかい香りするじゃないか
ごらんよ
僕らの下は　もう　陸地だ
ほら　空港がある
横浜だよ》

チェコ･コミック史上初の来日者は、1938 年の 11 月から 12 月頃に発売された『フェルダピーシュチャラの冒険』の主人公たちだ。後にチェコアニメ界の巨匠と呼ばれるヘルミーナ・ティールロヴァーが絵を描き、マリエ・ヴォルジーシュコヴァーがコミックに詩調の文を書いた。主人公の子供たちの「ニッポン」滞在は短いながらも、その後、長期間に渡り、チェココミックにおいて日本がどの様に表現されてきたかをよく表している。

フェルダとその友人、エミルとラーデァの島国日本での体験は、コミック原作者と原画画家にとって、日本はどんな国なのか、当時のチェコの子供読者に伝える機会でもあった。これらのイメージは、現代のチェコ人の心にも活き活きと残っている。

まず、日本の象徴として登場するのは、 ４コマ目の真ん中にはっきりと姿を見せる富士山だ。その手前には、寺院か城だろうか。建物が描かれている。他に日本の表し方が分からな

かったのだろう。富士山はコミック背景に２度現れる。桜や着物だけでなく、コミックのテキストや絵が誰もが知る日本のイメージを伝え、より堅実なものにする。
「ラーデァ、エミル、よく気をお付け
上品にするんだ
僕たちが客人として訪れているこの国は
優美さで知られる国だからね」
（６コマ目参照）
読者の子供たち向けの豆知識だろうか。ご飯は箸で食べると、教えるように描かれている。

このコミックが出版されてから何十年もの間、残念ながら、チェコの「日本らしさを伝える文化要素」の基礎的なイメージは余り変化しなかった。 1960 年代には、新幹線が登場し、その素晴らしいスピードが放つ光に桜や着物、芸者や侍が輝き、さらにその何年後かにはロボットのイメージがそこかしこに足されたくらいだ。1980 年代に西洋で大ヒットした曲、「ミスターロボット」で「ドモ　アリガート　ミスター　ロボット」と歌うように。

日本のイメージは変わりもせず、日本文化と向き合う新たな姿勢も見られなかった。研究意欲に欠けていたのか。それとも、チェコと日本が地理的に大きく離れているからか。いくら理由を並べてみても、口先だけの言い訳のように聞こえる。チェココミックを見れば一目瞭然だろう。『フェルダ　ピーシュチャラ』の日本の子供たちは、中国調の帽子を被り、男の子の服は中国風だ。異国情緒に溢れた国、日本は、アジアのどこかの国なのだ。

ここまで批判ばかりだが、そんなチェコ・コミックにも幾つかの例外がある。１９９０年代初期の作品、イヴォ・ペヒャルとイールジー・ペトラーチェクが周到な下調べをした上で描いたコミック『ゴロー、猿を守る犬』は、そんなコミックの一つだ。けれども、例外は例外であって、チェコ・コミックでは従来の古臭くて単純な日本の偏見をあちこちに振り撒かれている。

本コミック企画、『Iogi』はプルゼニュ西ボヘミア・ラディスラフ・ストナー大学美術デザイン部メディア・イラスト科で 2019 から 2021 にかけて生まれた。今、まさに読者が手にしているこの本は、『Iogi』の作品集だ。チェコ・コミック史における日本観を従来のそれとは全く違う方向に道付け、その第一歩を踏み出した試みだ。前述の『フェルダ・ピーシュチャラ』と比較してもらいたい。日本はただの遠方の国として使われているだろうか。描写はさらに細やかで、日本の今を伝えようとする。いや、日本と言っては語弊があるだろう。なぜなら、収録作品１１点の多くは日本の西部に位置する杉並区、もっと詳しく言えば井荻駅を中心とした地域を描いたものだからだ。この作品は日常を語る。そこに住んでいる人々、ふと迷い込んだ路地裏で目にするような人の生活の一幕だ。その日常の断片はただの雑学ではない。複雑で繊細なストーリーだ。「ロボット、ラブホテル、オタク、ゴスロリなど、日本に対する偏見からできるだけ離れ、富士山や寺院などガイドブックで語られることばかりに焦点を当てないようにしました。生活をストーリーの中心に据えたかった」と、本企画全作品ストーリーを手掛けたジャン=ギャスパール・パーレニーチェクは言う。チェコの知識人の間で文化大使と 呼ばれるパーレニーチェクは、フランス語とチェコ語で執筆するだけでなく、美術を初め様々な分野で活動している。『Iogi』は、そんなパーレニーチェクにコミックという新たな分野を切り開いた。パーレニーチェクは日本人の奥様と結婚された 2006 年から井荻を頻繁に訪れていたが、2017 年からは 2 人のお子様を連れて本格的に移住された。『Iogi』に収録された短編は、彼自身の体験から感じたこと、もしくは友人の話からインスピレーションを得た。日本に数日間だけ滞在した外国人観光客は、日本での体験をパターン化された偏見の中に押し込めてしまうことがある。外国でいくら魅力的なことに思えたとしても、それは現実とは違う。『Iogi』は、良い意味で、それらパターン化された日本のイメージを裏切る。『Iogi』に語り手を見つけるとすれば、興味深く、何も見逃さないよう

に見ている観察者だ。一般的にコミックやマンガの作品で語り手を分析するのは、文学のようには簡単ではないが、その土地や住民を書き写すだけに満足せず、人の心の機微をその人物背景と置かれた環境ともに描く。作者自身も外国人移住者としてそこに属しており、作者自身が魅了され、驚かされるものの、完全には理解できないことをも認識している。

テーマの選択と視点は『Iogi』の作品を通して触れることができる原作者の人となりそのもので、作品一つ一つを結び付けている。原画は何人もの学生が取り組んだ。本企画『Iogi』は、もともとはチェコを代表するコミック作家の一人で画家でもあるヴァーツラフ・シュライヒが指導する西ボヘミア大学のゼミで、2019 年の課題の一つとして出されたものだ。その数ヶ月前に、シュライヒは東京のパーレニーチェクに作品の原作執筆と文化面での監修を依頼したが、シュライヒがパーレニーチェクと知り合ったのは、2018 年に日本の武蔵野美術大学に外国人研究員としてシュライヒが中期滞在中のことだ。パーレニーチェク、シュライヒ共に、近未来的な響きと軽さを持った「クールジャパン」とは一味違う日本に触れたていたことも、『Iogi』が生まれた理由の一つだろう。

そして、課題が出されてから数週間後、『Iogi』はその年一番重要とまで言われる企画となった。シュライヒはパーレニーチェクの作品をただコミックとして可視化するに留まらず、パーレニーチェクは日本からチェコに飛び、学生に日本文化とマンガについて詳しい講義を数日に渡って（それは一日中講義をぶっとうしでした）行った。学生は作品を何十回と突っ返され、何百回と質問をぶつけた。質問の中にはとても一般的なものもあったし、学生が日本を知る努力すればするほど自分たちが無知なことに気付き、不安が大きくなることもあった。 始めた頃、学生は日本人の心情が全く分からず、ヨーロッパで見る感情表現をそのまま当て嵌めた。感情表現の強弱だけでなく、全く違う表情やジェスチャーが存在することを説明しなければならなかった。ヨーロッパでは言語で表しきれない感情を声の抑揚や表情、ジェスチャーで補うが、それが見られないからといって日本人に感情が少ないわけではないこと。日本語にはヨーロッパ言語に見られないニュアンスに富み、感情がより言語化されること。日本と言えば戦争映画や時代劇映画でしか知らない多くの西洋人は、大声で喚きちらす日本人が普通にいると信じて疑わない。日本人の表情は読み取り難くても、大げさなジェスチャーや感情表現をすると思っている。慣れてしまえば一見重要でないディティールにも細心の注意を払わなければならなかった。背景画にしてもしかり。パーレニーチェク自ら撮影し学生に見せた杉並区の街角の写真や映像参考資料は 1700 枚にもなる。講師の熱意と資料だけでなく、もちろん学生も頑張ったし、彼らが企画に魅力を見出してくれたからこそ、『Iogi』はチェコの美術大学で一般的に行われる課題の域を大幅に超えた前代未聞の大型プロジェクトになった。当初予定されていた学生数よりも企画参加希望者数が大幅に上回ったため、『Iogi』には、数人の学生が一つの同じストーリーを描いたものが収録されている。学生は作品が採点された後も修正を重ね、単行本出版準備に取り組んだ。残念ながら単行本に選出されなかった学生たちでさえ、選出された学生と同じように修正に取り組み、作品を完成させたのだから驚く。これは、ただの美術大学学生作品 集ではない。 『Iogi』は大学生の作品にも関わらず、日本チェコ・コミック史の様々な点において大きな意味を持った一冊だ。『Iogi』の企画展も、チェコと日本の数箇所で開催される。

では、日本文化に詳しくない外国人読者は『Iogi』を読めないだろうか。コミックにあるこれら全ての要素やその理解が出来ず、何か見落としてしまうのではないかと心配することはない。製作者たちが日本文化への理解を大いに深めていたとしても、話の内容は人間味に溢れ、それ故、あらゆる国の人が共感できる。このコミック本は、チェコ語、日本語だけでなく、英語とフランス語に翻訳される。多種多様な文化圏の人が手にするはずだ。それらの人々がどのような知識を持ち、いかように感じ、理解するかまでは、製作者たちも知りえない。日本を、杉並を、井荻を知らない世界の読者は、『Iogi』を読み終えた後、日本のイメージが自然と変わっているのに驚くだろう。原画を担当した若い海外コミック作家たちの出

身も、チェコ、スロヴァキアにロシアと多国籍だ。彼らが描く杉並を初めとした日本の空間や習慣、例えば杉並区妙正寺公園、軒下に干された柿、世界にも類を見ない神保町・御茶ノ水の書店街は、パーレニーチェク宅の「ご近所さん」や日本を良く知る方々にとっても多少異なる世界であるはずで、慣れ親しんだものとは違う線（コミックでは特に）と面を見せるはずだ。特にアートなどの文化の影響力が強い西洋では、憧れと偏見が入り混じった日本には、良くも悪くも歪んだイメージが根強い。 春画、セクシュアルなものまで売る自動販売機、世界中の子供たちが虜になったポケモン、ハリウッド映画界にまで進出したゴジラ、一風変わったメイドカフェ、近未来的な渋谷のスクランブル交差点。そして震災の恐怖。もちろん、そういった影響を受けた人には、作品『ニンジャ』に描かれている寺が京都の伏見にある醍醐寺だとか、「ひきこもり」が何を意味するかなど分からなくても、この『Iogi』に収録された作品には、これら一般読者が自身の価値観を日本に押し付けることなく日本を見つめさせるだけの魅力があり、読者を物語の中に引き込む力がある。

『フェルダ　ピーシュチャラ』の日本飛行の旅を読み返して、チェコでは知らないものはいない 20 世紀初頭の作家、ジョー・ホロウハを思った。ホロウハの日本を題材にした小説が大流行し、ホロウハ作品から「由緒正しき日本」の姿がボヘミアに広まったと言える。彼の最初の「日本風」恋愛小説、『嵐の中の桜』は 1905 年に出版された。ホロウハの初来日は、なんと『嵐の中の桜』が出版された翌年だった。美しい女性に恋焦がれて、遠くから見つめる青年のように、彼もまた、日本文化に直接触れることなく日本への思いを募らせた。1906 年 4 月 8 日、日本に滞在していたホロウハの日記には、こう記されている。「私が書いた私の桜の冒頭シーンに使用した場所を訪ねた。これから何が起こるだろう。これから何を見るだろうか。」

2020 年から続くこの歴史的な世界感染病大流行が収束すればではあるが、日本にはコミック作品だけが訪れるのではない。若いアーティストも行く予定だ。プルゼニュ大学は『Iogi』に参加した若きアーティストたちが、自分たちが描いた世界を観ることは絶対に必要だと、シュライヒとゼミ生の日本行きを提案した。

日本では何が彼らを待っているだろう。 彼らは何を見るだろう。碧き水平線からは、桜の花の柔らかな香りを感じるだろうか。

パヴェル・コジーネク(Pavel Kořínek)
コミック研究所、チェコ共和国科学アカデミーチェコ文学研究所（プラハ）、パラツキー大学芸術学部（オロモウツ）
Centrum pro studia komiksu ÚČL AV ČR a FF UP